

紫龍の末妹と笑顔の伝説の戦士

天龍神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

龍音はスイートプリキュアメンバーとの交流を経ていつもの日常に戻ったのも束の間、天界からライブメタル「モデルA」が転移してしまったという報告を受け、また、仲間達共に戦いへ赴き、そして、新たな出会いが待ち受けていた。

そして、龍音はある「少女」と出会ったことでまた世界を救う戦いに赴くのであった

※オリジナル展開を含むスマイルプリキュアの二次創作小説です

目次

七色の街へ	1
適合者発見!! いきなり窮地!?	3
ROCK SYSTEM 起動&美しき戦士の段	5
義姉妹	7
笑顔との	9
愛夢の日常	11
あなたがわたしでわたしがあなたの段	13
七色ヶ丘中学にやってきた龍音	15
運ぶ命と書いて「運命」と呼ぶの段	17
わたしが〇〇の段	19
まさかの!!	22
鳴くは流れの神の龍の音と星光り空の少女の関係	24
龍音達に会うべく	26
約束	28
客員武偵、大阪へ	30
修学旅行 前編	32
修学旅行 中編	34
修学旅行 後編 第一部	36
龍の末姫と笑顔の戦士達	38
修学旅行終わりの対面	40
答案用紙	42
宿題	44
一枚のカード	46
協力プレイでクリアしてやるぜ!!	48

サムライって	50
やっぱりこうなるの段	52
後で言うんだ	54
マジコンエ	57
漫才大会 前編	59
七色ヶ丘町の漫才大会	61
客員アツプデート	63
客員剣士!! 急げ	65

七色の街へ

スイートプリキュアメンバーとの共闘がきっかけでなのか、またプリキュア関係の依頼が舞い込んできた龍音達は、中学生で出来る限りの範囲で依頼に取り掛かったのであった。

念のために風都えを拠点にしている「二人で一人の仮面ライダー」にも協力を了承してもらっている上に、姉達も協力すると申し出ているので、龍音達は遠慮なく依頼を熟していたのであった。

今回の依頼内容は、幻想郷に迷い込んで発見され美龍飛達を使うライブメタルで全部で八つある内の一つにしてモデル「A」と呼ばれるタイプで能力は何と、「倒した相手の能力と姿をコピーする」という驚異的なもので、例えるならばディケイドライバーやジョーカーラウザーのような物であるがこの二つはカードの使用の有無があるのだが。

なんと、モデル「A」のAIが適合者を見つけたのか次元転移してしまい、天界の本部がその形跡を追った結果、

「ここが七色ヶ丘か、適合者って、みゆきじゃないよね？」

「間違っても、あいつの場合、プリキュアとして覚醒の方が早いだろ!!

って言っても女版「良太郎さん」なんだよな (T|T) / ~~~~

「土地勘ないよ!!」

『マスター!! わたし達をお忘れですか?』

「あ、そっか、お願い!! マシロ!!」

運命とは残酷でなのか、龍音達の親友の一人である「星空みゆき」の引越し先にして現在在籍している「七色ヶ丘中学」がある七色ヶ丘町までやって来てしまったのであった。

神崎和真はみゆきとの思い出を振り返ってみたようで、なぜか、特異点でモモタロス達イマジン共に戦うルトガーに肩を並べるほどの不幸体質だが精神面は強い仮面ライダー電王こと野上良太郎とダブってしまったようで、スノーホワイト改めキュアスノーこと姫河小雪は初めての土地に困惑してしまったのだが、インテリジェントデバイス「マシロ」のことを忘れていたようで、言われたことで機能に気

づき、プリキュアの情報を収集しながら街を歩くことにしたのであった。

幸いにも今日が土曜日で学校が休みであるので、中学生である龍音達が歩いていても目立たないのである。

「この街も活気があるね」

「へえ〜お好み焼き屋「あかね」か、あの人なら入って行きそうだな」

「お昼、ここで良いんじゃない?」

「そうだな」

龍音達は街の商店街を歩いていると関西ではメジャーなたこ焼きに並ぶ粉もんのお好み焼きを取り扱っている店を発見したのだが、店名が「あかね」という仮面ライダー龍騎の変身者であり天龍の従姉妹である明神朱音のことを思い出していたところで、昼食を此処で食べることにして、またライブメタルとプリキュアの搜索へ向かったのであった。

「このまま何事も起きずには行かないようで、

『マスター!! 結界が張られた反応が出ました!!』

「OK!! 行くよ!!」

「ああ」

全員のインテリジェントデバイスが何者かによる次元結界が張られた反応をキャッチしたようで、龍音達はそのまま現場に向かうために人気がない場所を発見したので、

龍音達「セットアップ」

「行くか」

バリアジャケットと神姫化と変身を完了し、現場へ急行したのであった。

これが運命の出会いになるとは誰も知る由もなかったのだから。

適合者発見!! いきなり窮地!?

異変を感じった龍音達が神姫化して現場へ急行したのであった。

一方、現場では、

「みんな!! どうすればいいの、わたしに戦う力があれば・・・」

「あはっははは(≧◇≦)!! おまえさんはそこで大人しく「プリキュア」がやられるのを見ているのがお似合いだわさ!! 無力なのだわさ!!」

「う・・・」

ある少女は病欠で休んでしまった生徒会長代わりに副会長の青木れいかを含むメンバーの付き添いで七色ヶ丘町にある小学校の体育館内に居たのだが、突如、周りの人々が悲しみ出した瞬間、一人、緑色のローブの如何にも毒リンゴを持ってきそうな老婆の魔女が張った結界の外へ放り出されてしまったのであった。

そして、一斉に青木れいか以外のメンバーがなんと一斉にプリキュアに変身した光景に何故か懐かしいと少女は思ってしまった。

それでも、プリキュアに変身した四人は手も足も出ないまま、魔女が創り出した鏡の魔物に叩き伏せられてしまったのであった。

少女は己の無力を嘆きながら魔女が張った結界に何度も拳を叩きつけていたのだった。

その時だった、

『おい!! 泣いている場合じゃない!!』

「え? 声が聞こえる、わたしだけ?」

『そうだ!! おまえにオイラの声が聞こえるなら「変身できる」はずだ!! 力を貸してやる!!』

「誰!? って(。D。)ノ!! なんで金属片が喋ってるの(。D。)ノ!! そうよ!! これは魔女が見せてる・・・」

『違う!! オイラはモデルA!! 意識を集中して、叫べ!! 《ロツクオン》って!!』

「スマイルチャージじゃないの(。D。)ノ!!」

突然どこからともなく黒と白と赤で目の部分が光っている金属の

塊が少女の目の前に現れたのであった。

少女は一度頬を掴ってみたが痛みを感じたので現実なのだと判明したところで、再び呼びかけられた金属の塊と対面して、それこそ天界の研究施設から転移してしまったライブメタルの一つ、モデルAで、やんちゃ坊主のような口調で話しかけられているのだが、なぜか少女にしかその声が聞こえていなかったものであった。

モデルAは自分の声が聞こえるなら「力」を貸せると少女に告げたのであった。

ロックオンと叫べと言われた少女はプリキュアと同じじゃないのと困惑していたのであった。

そこに、

「見つけたぞ モデルA、貴様が適合者？」

「初対面でいきなり「適合者」ってなによ!! そんなところじゃなかった!! プリキュア達を助けないと!!」

「待て!! 「変身」すれば、元の生活が送れる可能性が出るぞ!! と言っても、この状況で言えたことではないか」

「勿論!! (れいかか、助けてあげるから) ロックオン!!」

神姫化した龍音が一番乗りでやってきたので、モデルAが目の前にいる少女を適合者であると分かったので、龍音は少女の決断に委ねたのであった。

これがとんでもない戦いの火蓋が切って落とされたのだから

ROCK SYSTEM 起動&美しき戦士の段

客員モードの神姫化した龍音それを追うように後からヴィヴィオのバリアジャケットを黒にした龍音と同じ仮面をした天龍達も開いていた正面の扉から体育館の中に入ってきたのだが、

「アスナちゃん、まさか!!」

「どうやら、あいつが「適合者」らしい、回収したかったんだがな」

「もう遅いのです〜。(。∩。)ノ!!」

ライブメタル「モデルA」が目の前にいる少女がなんと適合者だったことで回収するはずだったモデルAを回収できなくなってしまったことを天龍達に告げたのであった。

そうすでに少女はモデルAに言われた通りに、

「ロックオン!!」

『rock system 起動開始!!』

少女が天高く右腕を伸ばし宣言した瞬間、少女の近くで浮遊していたライブメタル「モデルA」がRebirth of crystallized Knowledge SYSTEM 通称「ROCK SYSTEM」と呼ばれる機能をモデルAが作動させて、光の柱が立ち昇ったのであった。

それと同時に、紺色のロングヘアの少女がゆつくりと立ち上がり、

「これ以上の狼藉は許せません!!」

「さてと、白き天の使いよ、その微笑みを我らに!! ナース!!」

「看護師。(。∩。)ノ!! あれ、痛くなくなってる!!」

「そんなバカなのだわさ!! ってなんでおまえは「バッドエンド空間」に入っただけなのだわさ?」

「簡単だ、斬ってきた」

「おおお。(。∩。)ノ 真剣だよ。(。∩。)ノ!!」

「やるか?」

なんと敵の精神攻撃を撥ね退けてしまったようで魔女は驚いてしまった隙を見逃さず龍音が抜刀して結界を切裂いて中に侵入して、久

しぶりの再会を喜びたいが今は、怪我の治療を優先し、治癒術を発動して、四人のプリキュアの傷を癒したのであった。

立ち上がった少女が近くにいた羊(?)の妖精に説明を受けて言われた通りに、

「スマイルチャージ!!」

「れいかあああ!!」

「しんしんと降り積もる清き心!! キュアビーティ!!」

「五人そろったクル!! けど、プリキュアがいつぱいクル。(ㇿ) ノ!!」

「わたくしの可愛い義妹を傷付けた狼藉は償ってもらいます!!」

「どうしよう。(。・。・) わたし達出番ない」

「うん・・・」

「セリフ言えるくらいは出番はあるよ!!」

全員「さあ、おまえの罪を数えろ(なさい)(るんや)!!」

「数えてやらないだわさ!!」

れいかと呼ばれた少女は水色の長い髪に白鳥のような髪飾りをつけて水色のコスチュームを装備した戦士に変身したと同時に、先ほどの少女がライブメタル「モデルA」で変身完了して、赤と黒の装甲に両手にはプリキュアには似つかない二丁拳銃を持って結界を突っ切ってきたのであった。

そして、全員が出そろったのであの決め台詞を言って戦闘を再開したのであった。

「悪いな、この姿ではこういった喋り方しかできん!! 癪に障るなら、こつちの姿の方がいいのかな?」

四人のプリキュア「ええええっえ。(。D。)ノ!!」

緑のローブの魔女は召喚した鏡の魔物こと名前はアカンベエと言
うのだが、それを戦いを引き受けたビューティと愛夢が引き受けてる
のを観戦していると、ピンクのコスチュームを着ているがどこことなく
仮面ライダー電王ソードフォームにも見えなくない姿のプリキュア
は的確に二丁拳銃を操っている愛夢を見て、使い方次第では人を殺せ
る二丁拳銃を見て本物であると認識したので、神姫化している龍の仮
面を被り客員状態の龍音に茶化されて、怒ってきたので、龍音は客員
姿から血盟騎士団姿に先ほどの龍の仮面を被ったまま黒紫の髪から
栗色に前髪に薄紫色のメッシュが入り髪型がお嬢様結び姿に変身し
て見せて、話し方も客員姿の男口調の皮肉屋から正反対のお姉さん口
調になったので四人のプリキュアは驚いて体育館全体に響く大声で
叫んだのであった。

「行くわよ!!」

「ええ、プリキュア!!」

ビューティ&愛夢「ブリザードバースト!!」

「覚えてろだわさ!!」

一方で鏡のアカンベエの群れと交戦していたキュアビューティと
ライブメタル「モデルA」で変身した愛夢は息の合ったコンビネー
ションで片付けて行き、最後に二人で必殺技を放って魔女はお約束の
セリフを言って逃げて行ったのであった。

笑顔との

童話「白雪姫」に出てきそうな魔女はプリキュアに覚醒したれいかとライブメタル「モデルA」に選ばれた愛夢によって鏡のアカンベエごと撃退したのであった。

「わたし達が手を貸すまでもなかったようだね」

「ねえ、あなた誰なの？」

「人に名前を行くときは自分からなのです」

「そうだね」

「ごめん、わたし、キュアハッピーで」

「それ以上は言わない方がいい。わたしはアスナだよ」

「メールだよ」

「ラピュセルだ」

「キリトなのです」

「キリトの妹のリーファです」

「ラノベですか？」

龍音達「一番知らなそうな人物から「ライトノベル」って単語が出てきた（。∩。）ノ!!」

魔女の名は「マジヨリーナ」というまんま名前の敵と鏡のアカンベエが居なくなつて黒いオーラこと小さな羊ことキャンディによると「バッドエンドエナジー」と呼ばれていることを聞かされて、プリキュア達に質問攻めにされそうになつたので、龍音はサイバーゴーグル型の龍の仮面をしているがプリキュア達に視線を送つた瞬間、黙つたがビューティと愛夢だけ通用しなかつたのだ。

ピンクのコスチュームのプリキュアは龍音に名前を訪ねてきたのでいつもの癖で龍音は口調が違うだけだが自分から名乗るように言った。

やはり、いきなり名前を聞いたことは悪かつたと謝罪してきて、キュアハッピーと名乗つて変身前の名前を言おうとしたので、仕事柄、仕事とプライベートの名前を使っている龍音はキュアハッピーにそれ以上は不味いと釘を刺して、仕事上で名乗っているライトノベル

のヒロインから拝借した「アスナ」と名乗って、それに続くように仲間達も名乗って行ったのであった。

美緒も自分より年下の冬龍やヴィヴィオ、そして、アコが戦いに身を投じていると聞いていてもたってもいられなかった、もちろん、反対されたが、本人の意思が勝ったので、小雪同様に、見た目と戦闘力を強化するインテリジェントデバイスを授与されて、龍音同様に、ライトノベルの主人公の妹から拝借して「リーファ」と名乗ることにしたのであった。

そのためか、金髪碧眼にスタイル抜群の肉体を緑を基調にした軽鎧を着込んでいるバリアジャケットになったのであった。

龍音はサイバーゴーグルの下でまさか一番アニメなどを知らなさそうな人物からラノベなのかというほんわかかなツツコミを入れられて、驚いたのであった。

「愛夢、それはもうあなたの物よ。けど、使い方次第では簡単に人を殺せる物だよ!!」

「ええ、一番何故だか、理解できるの」

「いいな」

「さてと、わたし達はお暇しよう」

「待ってクル」

「いずれ、会えるさ」

そう言って龍音達は入り口から出て行ったのであった。

愛夢の日常

七色ヶ丘町の小学校襲撃事件から数日が経とうとしていた。

☒なんで・・・☒

「!! はあく、またあの夢か・・・」

『あの夢ってなんだ?』

「モデルAは知らなかったわね、わたしがこの「家」に拾われて養子になってからずっと極稀に見るの、わたしと同じくらいの女の子になんてって言われて」

「愛夢、速くしないと遅刻しますよ」

「待ってて!! ごめん、話は今度ね」

『わかった』

そう、あの日からずっとあの夢を見るようになるようになったのは半年前にこの七色ヶ丘町の青木家の前の道で行き倒れていた。

その上、何も覚えていない所謂記憶喪失同然のわたしを何も疑わずにここの家の人は家族の一員にしてくれた。

髪は腰まで伸びて毛先だけいかと同じ青色に燃え盛るような黒みがかかった赤色に右碧左紅つまり右眼が青色で左眼が赤色というオッドアイ。

最初はお医者さんに検査してもらったけど、何処も異常がないって言うってくれてたし大丈夫ってれいかも言うてくれたし。

しているなら、れいかと同じくらいスタイルがいいってことかな中学生にしてみれば羨ましがられるらしいけど

転入初日に大丈夫かなって思ってたら、なお達がすぐにわたしと友達になってくれたのはうれしかった、それから半年後にみゆきが転入して来て友達になってくれた。

みゆきは前の学校では「鳴流神龍音」や「獅子神天龍」って子と友達だって言うてたけ、歳は同じ年で成績優秀でスポーツ万能でも羨ましいのに、中学生にしては恵まれたスタイルの持ち主で男のより男らしい乙子って言ったけど、生きてる間に会ってみたいと思ってる。

それから、みゆき達が「プリキュア」って言う伝説の戦士に選ばれて戦ってるって知ってなぜか驚くことが出来なかった。

もしかすると前世ではわたしも「プリキュア」だったかもしれないのかな？

そんな時、この「モデルA」がわたしの元に現れて、それを仮面のプリキュア？達が追ってきたけど、わたしが変身しちゃったところを見て、モデルAと一緒にみんなと戦える。

「愛夢はなんだかうれしそうだな？」

「お兄ちゃんとお義父さんには教えない」

「年頃の女の子なんじゃし」

わたしはいつも通りに家族で楽しい朝の食事を取ってる。

「それじゃあ、行ってきます!!」

「行ってまいります」

「気よ付けて帰って来るのよー あの子、家に来てから明るくなりましたね」

「そういえば、初めて来た時は、怖がってたからな」

朝食を食べて終えてお父さん達に見送られてれいかと一緒に学校に向かった。

モデルAをいつでも変身できるようにあれからポケットに入れて
いる

「おはよう、れいか!! 愛夢!!」

「おはよう」

「おはようございます」

そう、あの時、本来なら返さないといけなかったライブメタル「モデルA」をあのお面の侍は託してくれた、異常は、愛と夢がある限りみんなを守るために戦う!!

プリキュアと一緒になら!!

あなたがわたしでわたしがあなたの段

姫夢がモデルAの適合者になって数日が経ち姫夢も妖精のキャンディから一緒にみゆき達プリキュア共に戦ってほしいと言われたが、本人は気乗りしなかったのだが、

「愛夢、いいですか、あなたも「プリキュア」なのですよ、うふふふ」と同じ年で義姉のれいかに脅し紛いに説得されて仲間になったのであった。

で名乗り口上などを決められていた。

現在は、

「助けて〜ほしいクル（。D。）ノ!!」

「助けて!! 龍音（>|<）!! 天龍!!」

「わかったから（こっちは学校が休校日で助かったよ）」

「龍音ちゃん、行こうか（∩・ω・∩）」

みゆきとキャンディから助けてほしいとスマホに連絡が入ってきた龍音と天龍は何となく二人が騒動を起こしてしまったので尻ぬぐをして欲しいと言うのであろうと、助けに向かうことになったのだ。みゆきが二人の番号を知っているのは転入する前に教えていたのだ。

二人とも学校が臨時休校になっていたので、すぐさま駆けつけることにしたのであった。

そして、数分後、

「はあく、貴様ら、普通、落ちてきた物が怪しいと思わないのか？」

「なんで〜龍音じゃないの（。D。）ノ!!」

「悪いな、龍音にも都合って言う物がある（いや、本人ですけど、ごめんね、みゆき）」

「そう言うこと」

反応を追って辿り着いた秘密基地らしい場所にみゆきとキャンディを見つけたのだが、なんと落ちてきた指輪を嵌めたら魂が入れ替わってしまったと言うのだ。

これを聞いた神姫化している（もちろん客員姿）の龍音は呆れてしまい、相棒の神姫化している天龍も苦笑いしかできなかったのであった。

入れ替わってしまった二人から龍音か天龍に来て欲しいと助けを求めたのに来てくれたのが不愛想な感じの仮面の侍と人当たりがいい仮面お侍にしか認識していないが、この二人がれっきとしたみゆきの親友の龍音と天龍なのだが、戦士としての経験が浅いのか全く気がなかつたのであった。

今は三人と一体しかいないので、

「仕方ない、この事は他言無用で頼む!! さてと、学校に行こう!!」

みゆき&キャンディ「ええっえええ（。皿。）ノ!! わたし（みゆき）になつちやつた（クル）!!」

「今日は、ここで大人しくしてね（>|<） 大丈夫、みゆきの癖までインプットしているから」

「うん」

「それじゃあ、わたしもここで待ってるから、学校が終わったら連絡して」

「勿論!!」

龍音がインテリジェントデバイスで変身魔法で星空みゆきに変身したのであった。

今からでも十分学校に間に合うので、学校が終わったらみゆきに変身した龍音が連絡するということで、今いるみゆき達プリキュアの秘密基地「秘密図書館」で天龍が入れ替わってしまった二人と待っていることになったのであった。

七色ヶ丘中学にやってきた龍音

拾ってしまったペアリングで魂が入れかわってしまったみゆきとキャンディの為に龍音が変身魔法で見た目も声もみゆきに変身してスマイルパクトは敢て借りずに七色ヶ丘中学に登校してたのであった。

「(クラスの担任教師は女のなんだ)」

と「星空みゆき」に変身している龍音は担任教師にも全くばれてないようで、仲間であるれいか達にはばれてなかったが、

「モデルA、あの子「みゆき」じゃないわね」

「気づいてたのか？ 下手にちよっかいかけるのは不味いし、泳がした方がいいだろ」

「そうね」

モデルAの力なのかなんとかなく愛夢だけは龍音がみゆきに変身していることに気づいていたが、今は学校なので下手に騒ぐと担任教師に絡まれるので泳がすことにしたのであった。

龍音が才色兼備と文武両道と容姿端麗を供えた能力の持ち主だが、星空みゆきはその真逆で童話「桃太郎」や「浦島太郎」や「金太郎」や「龍の子太郎」などの絵本や童話が好きで、仮面ライダー電王の変身者「野上良太郎」ほどではないが不幸体質で勉強面で難があるという性格を龍音は物の見事に演じ切ってしまったのであった。

「みゆき!! 秘密図書館へ行くで」

「うん (関西弁ははやてさん達で慣れてるから良かった。それにしても、みゆきったら転入しても宿題しないとは)」

龍音が変身している星空みゆきは無事に誰にもバレずに学校の授業を終えたのであった。

幸いにも部活がない日だったので、もういいだろうと日野あかねに関西弁で話しかけられて、みゆきが転入してから一緒に行動するメンバーで真正正銘の「星空みゆき」が待っている秘密図書館へ向かうのであった。

「暇だ〜!!」

「先輩、大人しくしなよ、良太郎は、喫茶店が忙しんだから」

「そんなことはわかってんだ!!」

「わかっているなら静かにしなさい!!」

「———」 z z z

一方でイマジンから時間改変を阻止している仮面ライダー電王の拠点の電車型タイムマシン「デンライナー」の車内ではモモタロス達が良太郎が実家の喫茶店の仕事で来れないので、モモタロスは退屈していたのであった。

相変わらずキンタロスは爆睡しているが。

「ん?」

「どうしたの? モモタロス?」

「誰かが助けを、ほんじゃ行ってきまゝす」

「ずるい!! ボクも!!」

「勝手に行くな!!」

何かの気配(臭い)に気づいたのかモモタロスは笑みを浮かべてノリノリで光の球になってデンライナーから出かけて行ったのであった。

それをリュウタロスが追いかけてしようとしたが、ハナに阻止されたのであった。

これが運命の出会いとなるとは誰も知る由もなかったのであった。

運ぶ命と書いて「運命」と呼ぶの段

龍音が変身している「星空みゆき」は日野あかね達共に秘密図書館へ向かっていたのであった。

だが、

「やっと見つけただわさ!!」

「マジヨリーナ!!」

「カワリーノはどこやっただわさ!!」

「あの「ペアリング」のネーミングセンスないわね。(。D。)」

「うん(カロールとアイさんよりかマシだがな)」

緑のローブの魔女ことマジヨリーナがやって来て出会って早々に自分が作った物だったんだろう、本物の星空みゆきとキャンデイが嵌めているペアリングがマジヨリーナが紛失したその名も「カワリーノ」という凛々の明星の団長とプラネテューヌ元諜報部員またはラントの領主並みのネーミングセンスに姫夢が呆れてしまい、みゆきに変身している龍音も苦笑いしかできなかったのであった。

そう言いながらもれいか達がコンパクト型変身アイテム「スマイルパクト」を取り出し、姫夢がポケットからライブメタル「モデルA」を取り出し掴んで、

れいか達「スマイルチャージ!! (ロックオン!!)」

「READY?—GO!! Go!! Let, GO!!」

「大陽サンサン!! 熱血パワー!! キュアサニー!!」

「ぴかぴかぴかりん!! じゃんけんぽん!! キュアピース!!」

「勇気りんりん!! 直球勝負!! キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる清き心!! キュアビューティ!!」

「変幻自在千変万化!! キュアアフエクシオン!! ? ねえ、まさかと思うけど?」

と一斉に変身を完了させたのであった。

龍音が変身している「みゆき」は心の中でカロールが最初にギルド名に着けようとした「勇気りんりん胸いっぱい団」と命名しようとしたことを思い出したのは言うまでもなかったのだ。

その時だった

「みんな〜」

サニー&マーチ&ピース「エええっえええ（。D。）ノ!! みゆき（ちゃん）が二人（。D。）ノ」

「どっちが本物やねん（；・・D・・）!!」

「あの〜」

「れいか、聞いてないわよ（・・ω・・）」

【あいつら、本当に戦士の資格があるのが不思議だぜ（。・。）】

有ろうことか神姫化した天龍が護衛に就いているとはいえ龍音が変身している「みゆき」と「キャンデイ」と魂が入れ替わってしまった「みゆき」がいくわしてしまい、サニー達が混乱してしまった。

ビューティとロックマンモデルA改めキュアアフエクシヨン姉妹は落ち着いていたが三人が聞く耳を持ちそうになかったのであった。モデルAも呆れてしまったのだ。

「え〜い!! 一体どういうことだわさ（。D。）ノ!!」

「お困りようだな!! 助けてやるよ!!」

「なに?」

「みゆき、袖から砂が!!」

マジヨリーナも思いもしなかった事態に収拾がついていなかったように驚いていたのにも関わらず近くにあった跨ってバネを利用して遊ぶアヒルさんの遊具をアカンベエに変えてしまったのであった。

そこに、龍音と天龍は聞きなれた声が出たのでその方向に向くと赤く光る光の球が飛んできてキャンデイの魂が入っているみゆきに憑りついてしまったのであった。

【試しに「ハッピー」に変身して見ろよ】

「出来るの（。D。）ノ!! トランスオン!!」

身した姫夢は全速力で走ったがもう既に間に合うはずがなかった瞬間、

「カキーン!!」

「カランカラン♪」

「え、みゆき、その「日本刀」はどこから?」

「だから!! その子はみゆきじゃないわよ!!」

「流石、モデルAに選ばれただけはあるな」

「その声は(。D。)ノ!!」

一変の迷いもなく抜刀して合計四本のスプリングを一刀両断してしまった右手に打刀を持った星空みゆきの姿がそこにあっただのである。

みゆきが鉄をましてや加工してある大きなスプリングを豆腐を斬るように両断して静かに佇んでいたのだから、れいかと姫夢以外は鳩が豆鉄砲を食ったような顔になってしまい、キュアハッピーにトランズオン、仮面ライダーディケイドと言えば「カメンライド」している姫夢とれいかは学校にいる時点で気づいていたようで、そして客員モードの声で喋り出した星空みゆきは大きく左腕を振り上げて払う動作をした瞬間、

「もう、隠す必要がないしな、おい「モモタロス」良太郎さんはどうした?」

「桃太郎?」

「実家の手伝いでこれねえらしくてな、変身!!」

〈SWORD FOAM〉

仮面の侍姿になって男口調で話し出した龍音はキャンディに憑依している赤い光の正体であるモモタロスに契約者である野上良太郎のことを訊ねると実家の手伝いで来れないらしく、そのまま持っている定期券を構えるとデンオウベルトが腰に巻かれてバックル部分に定期券をセタッチした瞬間、駅のホームで流れるメロディが流れて、ここに、

「俺!! 参上!!」

赤い装甲に白い両手足の装甲そして桃を模った仮面を被った赤い

仮面ライダー電王が右親指で自分を刺してまるで歌舞伎のような見えを切るようなポーズを決めて、参上したのであった。

まさかの!!

赤い桃を模した仮面ライダー電王ソードフォームに変身したみゆきに憑依したモモタロスはいつもの決めポーズをしていたのであった。

「いつも通りだな」

「おまえこそ、珍しいな、擬態なんかしてよ」

「わたしの体がああつああ（。D。）ノ!!」

「ようは、あのばあさん倒せばいいんだな？ 行くぜ行くぜ!!」

「待って!!」

「出遅れちゃった（・ω・）」

バッドエンド王国の自称発明家の魔女マジヨリーナはまさか仮面ライダー電王に邪魔されるとは考えていなかったので、慌てふためいているのであった。

そんなことを気にするモモタロスではなくデンガツシャーを圧倒言う間に連結しソードアートモードに組み立ててそのまま勢いよく、振りかざしながらマジヨリーナに突撃していったので、それに続くようにキュアハッピーに変身した姫夢とキュアビューティが攻撃を仕掛けに行つたのであった。

完全に出遅れてしまったマーチ達も攻撃を仕掛けに行つたのであった。

「アカンベェ!!」

「貴様には用がない」

「ばあさんよ、あんたが、元に戻るもん持つてるのはばれてんだよ!!」

「ローバーアイテム!!」

「誰が・・・ない!! どこに行つたのだわさ（。D。）ノ!!」

「この事（@^）／~~~~?」

「返せだわさ!! ドロボー!!」

「モトニモドールってまんまじゃねえか!! 良太郎の方がセンスある

ぜ!! 行くぜ!!」

「元に戻れた?」

「なんとかクル」

アヒル遊具アカンベエがミサイルを放ってきたが龍音と天龍が斬り捨てバッドエンド空間を利用して破壊し、冷静さを欠いたマジョリーナから天龍が栄養ドリンクのビンらしきものにぐ丁寧に「モトニモドール」とラベルが張られた薬をくすね盗ったのだ。

マジョリーナからくすねたモトニモドールを仮面ライダー電王ソードフォームが堂々と頭から被って無事にキャンディとみゆきが元の肉体に戻ったのだが現在みゆきは仮面ライダー電王ソードフォームに変身したままであった。

〈FULL CHARGE〉

「俺の必殺技・・・パートIIに見せかけて直球ど真ん中!!」

「やめてえっええ(。D。)ノ!!」

モモタロスはみゆきの肉体のまま仮面ライダー電王ソードフォームに変身した状態でライダーパスをバックルの部分にセタッチしてチャージ完了の音声が鳴った瞬間デンガツシャーソードの刀身が光り出して刀身を飛ばすと見せかけてそのまま剣道の居抜胴を仕掛けた瞬間、元の人格者のみゆきが思わず大声でやめると叫んだのであった。

「おまえも「特異点」なのかよ(。D。)ノ!!」

「みんな、わたし達でやるよ!!」

「そうですね」

「プリキュア」

「魔神剣!!」

「なんか変な技に!!」

「覚えてろだわさ!!」

なんとみゆきも良太郎と同じく特異点だったのでイマジンであるモモタロスを止めてしまったのであった。

と言ってもビューティ達と龍音による攻撃でアカンベエ共々マジョリーナを退却させたのであった。

鳴くは流れの神の龍の音と星光り空の少女の関係

マジヨリーナが紛失したイレカワールで入れ替わってしまった星空みゆきとキャンディは天龍がマーチ達を囮にしてマジヨリーナから掠め取ったファイト一発と叫んでいそうなCMが脳内再生されそうな大きさの茶色のビンに「モトニモドール」と身もふたもないネーミングセンスだが、それを仮面ライダー電王ソードフォームに変身したモモタロスに憑依されてしまったみゆきに手渡してモモタロスが間違っただけか頭からモトニモドールを被るという行動に出たが無事に元に戻れたが仮面ライダー電王ソードフォームはモモタロスが憑依して変身しているのでみゆきが憑りつかれたままだったが、なんとみゆきが、モモタロスを制止してしまったことで時間改変に影響しない体質を持った「特異点」だったことが判明したのであった。

「くっそ〜!!」

「ダメツたらダメ!!」

「もう!! わたし達でやるから!!」

「なんで!! わたしがもう二人いるの!! あ、メールが変身してるんだ!!」

「違いますよ、ハッピー、アフエクシオンがハッピーに変身してたんですよ」

「わたし達は帰るが」

「ちよつと待ってよ〜!! みゆきちちゃんと知り合いたいだけど?」

「鳴流神龍音の知り合いだ(というより本人なんだけど)詳しいことはみゆきに聞くんだな」

魔女マジヨリーナとアヒル遊具アカンベエを退けて、アヒル遊具は元に戻っているので安心だが、現在、秘密図書館で星空みゆきが憑依していたモモタロスにお説教をしていたのであった。

龍音と天龍はこのメンバーは簡単に自分達を秘密基地に招き入れていることに対して呆れていたものであった。

れいかモデルAの特殊能力「トランス」について説明していると、黄瀬やよいから神姫化した龍音と天龍になんで星空みゆきのこ

とを知っているのかと聞かれたので、知り合いとだけ答えて、詳しい内容はみゆきにでも聞いて欲しいといって足早に秘密図書館から出て行ったのであった。

「愛夢!! なんで教えてくれなかったの!!」

「不用意に教えたら、あなたの場合、敵に知られるから」

「だって、わたしに変身できるなんてすごいんだもん!!」

「それを言うなら、あの「アスナ」達もやで、みゆきは何か知つとるんとちゃうん?」

「そうだよね。鳴流神龍音と知り合いなんでしょ「アスナ」は」

愛夢がモデルAのトランス能力でキュアハッピーに変身したことを見てみゆきがなんで教えてくれなかったのかと質問したので、不用意に教えられないと答えたのであった。

確かに不用意に教えれば敵に知られてそれを参考にやられるかもしれないのだが、元は愛夢の優しさが故なのだが。

あかねは神姫化している龍音がみゆきとは親友の鳴流神龍音のことを言い残して去って行ったのを思い出して、やよいがみゆきに教えてほしいと詰め寄ったのであった。

龍音達に会うべく

神姫化した龍音達の事を知っているみゆきにあかね達が質問攻めにし始めたのであった。

「落ち着きなさいよ!! みゆき困るじゃない!!」

「そうですよ、皆さん、みゆきさんの体は一個しかないんですから!!」
「ごめん」

これは止めないといけないと青木姉妹が止めに入って注意してみゆきはほっとしたのであった。

みゆき達はこの二人は本当に血が繋がってないはずなのに、息の合ったコンビネーションをするので心では実の姉妹以上に絆が繋がってるのだと認識したのであった。

落ち着いたところでみゆきは龍音達について話すことにしたのであった。

プリキュアに変身できるようになった時に龍音達については転校するまでに記憶している内容で話せるところは話していたのでだいたいにはわかっていたのであった。

「それじゃあ!! 龍音って男じゃないの!!」

「なお達はそこで驚いて突っ込むの?」

「みゆきさんのご友人なんですから」

「勉強が出来る、スポーツ万能で、中学生離れた肉体の友達がいるっていいな」

「それもそうやけど、みゆきが住んどった場所に「精霊」ってのがいるのが信じられへんわ」

「拙者も存じてなかったでござる」

「なんで教えてくれなかったクル?」

あかね達はなぜか龍音が男ではなく自分達と同年の女の子であることに驚いていたので、あむが呆れ、れいかは相変わらずの天然ぶりだが解説を行っていたのであった。

もちろんみゆきが以前住んで居た場所が精霊が出現する区域にしてされていたことも明かして、妖精であるポップとキャンディまでも

驚いていたのであった。

妖精であるキャンディからすればなんでプリキュアに覚醒した時にでも話してくれればとみゆきに質問したところ、

「信じてくれないと思ったし、忘れてたんだもん!!」

「みゆきらしいクル」

「別に言わなくて正解だったわね」

「みゆきちゃんだと、おとぎ話だって言われて終わるよね」

「やよいには言われたくない!!」

「鳴流神龍音と獅子神天龍か、名前が強そうやな」

「名は体を表すといえますし」

「実際、会った方が早いわね」

どうやら転入手続きやプリキュアに変身したりと大忙しだったので忘れていたのと、童話が好きなのでおとぎ話だと言われて信じてもらえないと思ったからとみゆきらしい発言をしたのであった。

そして、実際に龍音達に会うことになったので、

「みゆき、連絡先は知ってるんでしょ?」

「うん、向こうも都合があるから」

「それは仕方ないよ」

「なんか、忘れそうね」

みゆきが窓口になることになったのであった。

約束

れいか達はみゆきに龍音達に会うことを懇願していたのであった。みゆきははじめは龍音達の都合も考えたのだが、仲間達に（特にれいか）に根負けしてしまい仕方なく自分のスマホで龍音に連絡したのであった。

「もしもし！ 龍音!!」

「みゆき、どうしたの〜?」

「今度の土日ってスケジュールって空いてる?」

「天龍達も空いてるけど」

「会えるかな?」

「いいよ。七色ヶ丘って都立来禅の近くだし」

「ありがとう!!」

幸いにも龍音は元の姿でスマホをというより画面を確認して元の姿に戻っていてくれたのであろう、連絡相手がみゆきであることを確認して繋いで、休みの日に会うことを約束したのであった。

「大丈夫だって」

「楽しみね」

「修学旅行終わりの最初の土曜日ですね」

みゆきは龍音が会うことを承諾してくれたことをれいか達に告げてれいかは学校のスケジュールを見てちようと修学旅行が終わった最初の土曜日だと言ったのであった。

どうやら、龍音達が通う学校とは違い七色ヶ丘中学は中学二年で修学旅行が執り行われることは龍音達はとっくに検索済みなのである。

「龍音、みゆきか?」

「うん、今度の土曜日に会うことになったから」

「オレもだろうか」

「と言いながら、行くんでしょ「修学旅行」に」

「七色ヶ丘中学の修学旅行とまさか、仕事先が重なるなんて」

「運命ですね!! 龍音お姉さま!!」

「奇跡だよ」

龍音は客員武偵の仕事を任されたようでもさかの行き先が七色ヶ丘中学の修学旅行先という狙ったのかとツツコミ満載な内容だったので、完全に一年早い修学旅行へ行くという格好で向かうことになったのであった。

コードネーム「リーファ」と勝手に名乗っている美緒は目を輝かせており龍音に両瞳ともハートマーク状態でじやれてきたのであった。龍音からすれば妹同然の扱いになって来ている。

未だにみゆき達スマイルプリキュアメンバーは龍音達があの特であることに気づいてないは言うまでもなかった。

何故、他校である七色ヶ丘中学の修学旅行を追いかけるように依頼が舞い込んだのと言うと、遡る事数分前、

「龍音、出張のお仕事を持ってきたのだけど？」

「出張って、いいけど」

「良かったわ!! 龍音達じゃないと出来ない依頼だから、内容は、この日に地域に行ってほしいのよ」

「わかった!!」

と言った感じで龍音ははであり上司になる剣心が持ってきた遠でになる依頼を受けることにしたのであった。

依頼先がまさか七色ヶ丘中学の修学旅行先と同じとはおもってかた思っただけだったのだから

客員武偵、大阪へ

七色ヶ丘中学の修学旅行先がまさかの出張先とブッキングしてしまっただがそれも予想範囲内なのは龍音達が日々の努力の賜物である証なのだ。

そして、七色ヶ丘中学の修学旅行の日

「龍音達のお土産って何がいいかな？」

「そうですね、みゆきさんが見せてくれた写真を見る限り、和菓子は避けた方がいいでしょ」

「実家が和風喫茶の娘なんだから」

「行ってみたい!!」

「なおつたら、食べることばっかりなんだから!!」

「だって!!」

「やっぱり「木刀」でしょうか？」

「れいか!! 龍音は女よ!! 実家が武術道場よ!! 木刀なんていっぱい持つてるわよ!!」

「着いてからにせえへん」

決行日に至るまで、マジョリーナなどの妨害があったりとしたがさり気なく助けしてくれる黒紫の龍の仮面女侍達に助けられながらもこぎつけたみゆき達は新幹線で一日目の目的地である大阪へ向かっていたのであった。

あかねは故郷に里帰りということもあり、なおは食い倒れの街に行くという高揚感が高まり、みゆきはいつもの好奇心旺盛で、やよいも同じくらいはしゃいでおり、れいかは至って冷静だと思った矢先に龍音達の土産に「木刀」を提案するという斜め上の意見を述べて、あむがきりきり舞い状態で場を治めていたのであった。

それをあむの制服のポケットで聞いていたモデルAは面白がっていたのであった。

入れ替わってしまった星空みゆきとキャンディ事件の日からスマイルプリキュアメンバー全員となんと仮面ライダー電王ソードフォームまでだが仮面ライダーに変身できるようにモデルAの変身

能力が更新された。

あむは未だ自分が何者なのかとわからないでいるが、みゆき達といるので気にしなくなっていたのであった。

あむは飛行機ではなく新幹線と言う電王と言うよりイマジン、モモタロスに出会ったことを思い出していたのであった。

あの後、

「よ〜し!!」

「モモタロス〜!! 向かいに来たよ!!」

「おう!! じゃあな、楽しかったぜ!!」

「このバカ!!」

「なんも言ってるねえのに殴んじゃねえ!!」

「今度、ゆつくりお話ししようね」

「はい」

と言った感じでモモタロスは良太郎達に連れて帰ってもらったのであった。

みゆきのスマイルパクトに「電王デコル」が使えるようになっていたのであった。

それからと言う物、ミニマムにされてなおがダンゴムシに追いかけて回されたりなどもあったが神姫化した龍音達が助けに来る事態が後を絶たないのであった。

一方その頃、

「大阪とはね」

「来たぜ!! 大阪!!」

「礼龍ちゃん達、お仕事だよ!!」

「大阪か、大龍さん達に話聞いておいて良かった」

龍音達はフラクシナスから大阪に乗り込んでおり後はみゆき達七色ヶ丘中学の面々を待つだけになったのであった。

修学旅行 前編

大阪に先回りした龍音達はスマイルプリキュアメンバーを待つだけになったのであった。

ちなみに、大阪に行く聞いて姉達からお土産を買って帰らないと行けなくなったのは言うまでもなかった。

「修学旅行気分だね」

「あのメンバー全員」

「ウエーイ!!」

「劍崎さんの掛け声だよ・・・」

と言った感じで完全に仕事そっちのけで大阪を満喫する気満々の礼龍と志澄琥に呆れていたのであった。

もちろんのことながら、

「お兄ちゃん!!」

「目立つから!!」

「颯ちゃん!! ウフ」

「小雪!! 当たってる!!」

神崎和真兄妹と岸辺颯太と姫河小雪も一緒について来たのであった。

傍から見ても颯太と小雪がカップルに見えるのは必然なのは一目瞭然だった。

流石にスマイルプリキュアメンバー達の大阪での目的地は今の姿では向かうわけにはいかない。

それは龍音達は百も承知で大阪に乗り込んだのだから

「敵は、完全に今日は動く気配はないか」

「そうみたい」

「大阪は人口が多いですから、こんなところでアカンベエを放つても、大阪の人達ならバッドエンド空間は効かないかもしれない」

「それじゃあ、お好み焼きとたこ焼き買って帰ろうか」

「うん!!」

とどうやら今回はバッドエンドの方に偵察に送っていたスズメ型

メカで映っていたのは出撃するためにババ抜きで遊んでいたマジョリーナ達だったので、龍音達は家族へのお土産である「お好み焼き」と「たこ焼き」を購入してメンバー全員で帰って行ったのであった。

今回ばかりはマジョリーナ達を泳がすことに決めたのであった。

「？」

「どないしたん？ みゆき」

「見間違いかな？ 龍音が居たような」

「あのね、ここは大阪よ!! 龍音達は今東京よ!!」

「そうだよね」

「みゆきさん、完全に思い人を探している顔になってましたよ」

「ちよつと!! 龍音は女の子だし!! 絶対!! 恋人だっているよ!!」

なお達「恋人（。D。）ノへなんでいった!!」

大阪の人込みをかき分けながら慣れない道を歩くみゆきは東京にいるはずの龍音が大阪いるとは思ってもよらなかったのか、一瞬だけ見かけたところであかねにどうしたのかと聞かれて、普通に龍音を見かけたと言ったのであった。

あむも呆れて東京にいる龍音がわざわざ学校を抜け出して大阪に来るはずがないと言うと、みゆきは確かにそうだといいただのだが、れいかがまるでみゆきは思い人を待っている人の顔だと述べたので、みゆきは龍音が女であることを知っているので否定したが、なお達はみゆきの恋人発言に驚いたのであった。

修学旅行 中編

スマイルプリキュアメンバーの護衛の為に龍音達が密かに見守りながら神姫化の機会をうかがっていたのだが何もなま一日目が過ぎようとしたのであった。

「みゆき、お願いだから、現実での好みのタイプを話さないよ!!」
「どうして〜」

「さすがに、ピーターパンはないよ」

どうやら宿泊先の旅館でスマイルプリキュアメンバー全員が担任教師の手回しなのだろう、相部屋になっていたようで、年頃の女の子らしく恋愛について話していたのだが、童話などが好きなみゆきは好きな男性のタイプをピーターパンと言ったので流石にその場にいたメンバー全員がどうしていいのかわからなかったので、あむが呆れて現実世界でお願いと返したのであった。

「みゆきちちゃんに恋愛は無理だったか、それにしても、れいかちゃんもそうだけど、あむちゃんも、本当に中学って思うくらいだよね」

「うん、うちも、れいかとあむくらいなナイスボディやったらなく」

「あのね、いつも通りの生活してたらこうなったの!!」

「それは、半年前からでしょ」

「そうだけど・・・」

「それに、プリキュアについてなんか知ってそうな顔してたし」

「なんでかなくぼんやりとしかく見えないのいずれ思い出せるから」

「なんか、ごめん」

「いいの」

やはり、龍音や天龍ほどではないが中学生にしては体つきがいいれいか&あむ姉妹にみゆき達は見惚れていたのであった。

やよいは悪気が無いのだが、いつもの癖であむに昔の事を聞いてしまったのであった。

あむは一瞬悲しそうな顔したが、すぐに何ともないと言った顔に戻って、ぼんやりにしか思い出せてないと答えたのであった。

流石に、これには好奇心旺盛なほかのスマイルプリキュアメンバー

も申し訳なきような空気になってしまったので、あむがいいのだと言ったのであった。

確かに、自分が何者かどころも誰でもわからないのにも拘らず、何も疑われないで養子にしてくれた青木家は大切な家族で、「愛」の「夢」と書いて「愛夢」（あむ）と名付けてくれたのだから。

れいかとは同い年で本当の姉妹に見えるくらいに仲が良く、みゆきに出会いすぐに友達に成り、そして成りより、適合者しか聞こえない音声で喋る金属生命体ライブメタル「モデルA」との奇跡の出会いにあむにとつて運命だったのかもしれないと、そして、

「ライブメタルは人を簡単に殺すことができる、それは貴様次第」と言い残して去って行った黒紫の龍の女侍との出会いを経てあむはいずれ来る「真実」に向き合うため、何より、今の修学旅行を楽しみなのであった。

修学旅行 後編 第一部

修学旅行一日目は何事もなく終えたスマイルプリキュアメンバーこと七色ヶ丘中学のメンバー全員は二日目の目的地である近畿地方で大阪に続いて有名な「京都」へ向かったのであった。

流石に龍音達はいつも通りの授業に勤しんでいるので護衛に就けていなかったのもであった。

「よし、今のうちにやるオニー!!」

「(あらま、あの赤鬼、わたしが見てるってことに気が付いてないのね)」

龍音達が護衛にいないことをいいことにはしゃいでいたのはモモタロス同じく赤鬼であるその名もアカオーニと何故か伸ばし棒が入っただけの見たまんまのアカオーニは浮かれていたが、それをスキマ妖怪の八雲紫に見られていることを知る由もなかったのであった。

一方、七色ヶ丘中学御一行は無事に京都に到着して各自班行動をとっていたのであった。

それか龍音達曰く「女版野上良太郎」と化した星空みゆきによる不運な出来事に遭遇するのであった。

神社でおみくじを引いたスマイルプリキュアメンバーで唯一の「大凶」を引き当て、こけしがドミノ倒しで倒れて来て下敷きに、水路に落下、公園の池に嵌るなど完全に女版電王になれる素質「特異点」を持っていたためにプリキュアと電王に変身できるのだが。

これだけあって無傷同然と言う幸運とのか悪運と言うのかわからない運を兼ね備えているようだ。

「みゆき、大丈夫なの？」

「大丈夫!! (良太郎さんだってこんなことじゃへこたれないから!!)」

「みゆきちゃん、まさか」

「うん」

「良太郎さんに一目惚れですね」

「れいか!! 公の場で何言ってるの!!」

なんとかスマイルプリキュアメンバーは本来の目的地である「清水

の舞台から飛び降りる」と言われるほど有名な清水寺にやってきたので記念撮影をすることにしたのだが、先ほどのみゆきに降りかかる数々の出来事を振り返ってあむが心配していると、みゆきは笑顔で大丈夫と一目だけだが時の列車ことタイムマシンである「デンライナー」に乗っていた野上良太郎に惚れてしまったようで、そのことは敢て知らない振りを貫き通していたのだが、れいかが天然なのか堂々とした顔で清水寺の境内で暴露してしまいあむ達が大慌てで注意したのであった。

れいかが悪気がないのは明白なのだが、気を取り直して清水寺の境内でまだ青いが紅葉をバックに写真を撮ることにしたのであった。

「はい、チーズ!!」

「カシャ!!」

「早く現像したいな〜」

「焦らなくても」

バッドエンド王国から刺客がやって来ているが八雲紫が監視しているが、アカオーニはちやつかりスマイルプリキュアメンバーの記念撮影にワイプのように映り込んでいたのは別の話であった。

龍の末姫と笑顔の戦士達

修学旅行二日目に入った七色ヶ丘中学御一行にバッドエンド王国の刺客であるアカオーニが仕掛けようとしたが、

「バッドエンドエナジーを集めるオニー!!」

「はい、そのあなた、何しようとしているのかしら?」

「ん!? なんて人間が飛んでるオニー。(。D。)ノ!!」

「飛んじや悪い? 大方検討は着いてるから、やめなさい!!」

「覚えてろオニく(T|T)ノ」

「鬼は鬼でも、勇儀の方が鬼らしいわね」

スキマ妖怪の八雲紫に見られていることに気づいていなかったの
でアカンベエを放つ前に釘を刺されたアカオーニ八雲紫に恐れをな
して一目散に逃げて行つたのであった。

それを見届けた八雲紫は呆れながら幻想郷の旧地獄の鬼である星
熊勇儀の事をを思い浮かべていたのであった。

「これで「プリキュアメンバー」と「あの子」は無事に修学旅行を終え
られるわね」

「ん?」

「どうかしました? あむ?」

「なんか居たような?」

「バッドエンド王国の刺客が来てもいい頃だよね」

「いいんちやう」

八雲紫が修学旅行を楽しんでいる七色ヶ丘中学の面々を見て笑みを
浮かべてそのままスキマを作り幻想郷へ帰って行つたのであった。

モデルAの適合者なのかあむは何かの気配に気づいたが八雲紫に
見つかって計画が台無しになったアカオーニが逃げて行つた後だつ
たので、スマイルプリキュアメンバーは無事に修学旅行を終えたので
あった。

一方バッドエンド王国では、

「どうした、何か怖い物を見た顔してよ」

「あの女には逆らってはダメだオニー・・・」

「プリキュアか、それとも仮面の女か？」

「行っちゃいましたね」

帰還したアカオーニが物凄い怯えた顔をして帰って来たのでウルフルン達がスマイルプリキュアメンバーか若しくは仮面の女つまり龍音達にやられたのかと問いたでしたがアカオーニはそのまま奥へ行ってしまったので、ピエロのような格好で仮面をつけている男が言ったのであった。

それから約束の土曜日になったのである。

「お待たせ!!」

「龍音!! 天龍!!」

「みゆき、久しぶりって、どこに顔突っ込んでるの!!」

「みゆきさん、この方が、初めまして、わたくし青木家長女の青木れいかと申します、こっちが」

「妹のあむ、よろしく」

「みゆきちゃんの友達の黄瀬やよい」

「日野あかねや!!」

「緑川なお、よろしく」

「ボクの方こそ、みゆきの幼馴染の鳴流神龍音!! よろしくね」

約束通りに龍音達はみゆき達と素の姿で再会を果たしたのであった。

みゆきは久しぶりの頼れる親友たちに出会えたのか龍音のサラシ型の下着で補正してある豊満な胸に顔から突っ込んで行っていたのであった。

修学旅行終わりの対面

修学旅行から帰ってきたスマイルプリキュアメンバーと人間体の姿で対面した龍音達は久しぶりの幼馴染である星空みゆきと出会って変わってないなと思っていたのであった。

みゆきはまさか遠路はるばると言っても電車(デンライナーではない)に乗って二つ目の駅になるので距離は気にならないのだが、それでも久しぶりの再会なのかみゆきはそのままの勢いで龍音に抱き付いたのであった。

流石の龍音の婚約者である和真も目のやり場に困っていたのであった。

「あんたら誰や?」

「神崎和真、みゆきとは只の幼馴染の一人だ(はやてさんもそうだけど、関西出身って勢いあるな)」

「ボクも龍音ちゃんたちの友達の神楽堂春龍、春の龍って書いて「ハルト」っていうんだけど」

「物凄いカッコイイ名前ですね」

「これでも「女」だよ!!」

「わかってるんだけど、同性のわたしでも惚れちやいそうなんだよ!!」

☒マスターは惚れやすいんかにや?☒

あかねは同行していた和真達に気が付いたので自己紹介を順番にしたのだが、春龍が名乗ったのだが、春龍が無意識に放つ守らないといけないオーラとれいか並みの天然とほんわか合わさってしまい、同じ女であるはずのなおが惚れそうだと言いついたのであった。

れいかは春龍(はると)と言う名前がかっこいいと褒めたのである。褒められた春龍は顔を赤くして恥ずかしがっていたのであった。

言っておくが、春龍もスマイルプリキュアメンバーより背が高いのだが同い年なのである。

龍音達の神姫時にしか出会ってないので目の前にいる人物こそが危ないところを助けてくれている仮面の侍なのだとスマイルプリキュアメンバーは知る由もなかったのであった。

「そうだ!! これ、修学旅行のお土産なんだ」

「いいの? ありがとう」

「龍音もそうだけど、助けてもらうヒロインと言うよりどちらかと言うと、助けちゃうヒロインって感じだよね」

「オレはどうなんだよ?」

「そーいや、アンタのことすっかり忘れてたわ!!」

「なんで!!」

みゆきは久しぶりの再会にと修学旅行先で購入したお土産を龍音達に渡したのであった。

ちなみに分け合って頭部が崩壊してしまった人形は現在自宅にあるということだった。

特撮ヒーローやアニメが好きなやよいは龍音達を見て「助けてもらうお姫様と言うよりかどちらかと言うと逆に主人公を助けちゃうヒロインタイプ」と評して、完全に和真が頼りない存在になってしまったのであった。

目に前にいたのにも関わらずあかねは眼中に無かったのだった。

いかを見守ることにすることを提案したのであった。

その提案には龍音も承諾したのであった。

「ん？ みゆき、これ？」

「見ないで（。∩。）ノ！！」

「おまえ、テストも変わらないな」

「その様子だと、れいかちゃんとおむちちゃん以外は壊滅状態じゃないの？」

みゆき達「それ以上はなにも言わないで（といて）（。∩。）ノへやメター？」

床に一枚の紙が落ちているのを見つけた龍音が拾ってみると国語の答案用紙であったのだが、完全に赤点ラインを超えていた点数が書かれていたのであった。

それを見たみゆきは大慌てで龍音から自分の落とした国語の答案用紙を取り返した所で、天龍の感と天然がベストマッチしてしまい、青木姉妹以外が顔を赤くして恥ずかしくていたのであった。

そのやり取りを見て龍音達はアドリビトム組の赤い二刀流が掛け算すら出来ないことを思い出したのは言うまでもなかった。

宿題

龍音達が秘密図書館の床にてみゆき達の中間テストの赤点が多数見受けられる答案用紙を拾いみゆき達は恥ずかしがっていたのであった。

「なんで、ここで宿題なの。(。D。)ノ!!」

「いや、まさか、宿題もしてなかったとは、思ってたから(へー)」

「龍音の背後に龍が(；。D。)^」

「龍音達、怖いクル(。D。)^ノ」

「かなりの覇気でござる!!」

流石の心優しい龍音でも久しぶりに再会した幼馴染が全く勉強面が壊滅しているのはまだしも、類が友を呼ぶとは言ってもので、まさかの転入先でも、青木姉妹以外のスマイルプリキュアメンバーが勉強面で難があるという結果に龍音どころか、ついて来たメンバー全員が顔は笑っているのだが背後にイメーヅカラーの龍が蜷局を巻いている東洋の龍がスマイルプリキュアメンバーの目には見えているようで、本当は真正正銘の龍神にして神姫であるのだが。

ライオンの妖精で侍にしてキャンディの兄であるポップは龍音達の覇気を感じ取っていたのであった。

ポップとキャンディは龍音達に「プリキュア」になって欲しいと思っているようだが、とつくに「プリキュア」以上の能力を持っている存在であることは気付いていなかったなのであった。

とはいえ、このまま遊びに行くと言う訳にはいかず、龍音達のみゆき達の宿題を見ることになったのであった。

「龍音達の通ってる学校のレベルがアタシ達と違うんだけど(・ω・)」

「そうかな?」

「みゆきちちゃんも通ってたっていうから」

「やよい、龍音達がいるからや!!」

文武両道の龍音の手解きは分かりやすいようで、幼馴染であるみゆ

きをはじめとするスマイルプリキュアメンバーの勉強面に難があるメンバーも問題を解けるようになっていたのであった。

七色ヶ丘中学と都立来禅中学とはさほどレベルに違いはないのだが。

「とりあえず、ここまでにして、外に行こうよ」

「そうですわね」

「そうね、行きましょう」

「うん」

キリがいいところで龍音達から街へ行くことが提案されたのでスマイルプリキュアメンバー共に街へ向かうことになったのであった。

みゆき達は宿題から解放されたことで安堵していたの言うまでもないが。

「それじゃあ、ボク達はこっちで」

「わかった、後で合流だよ!!」

「行こうか」

「はい」

七色ヶ丘の街に到着したのだが流石に大人数で歩くのは目立つので二手に別れて行動することになり、龍音の班にれいかが同行することになり、代わりに天龍と春龍が付いて行ったのであった。

一枚のカード

宿題を終えたスマイルプリキュアメンバーと一緒に七色ヶ丘の街へ繰り出した龍音達は二手に別れることを提案して、龍音がいるパーティーにれいかを入れて街中を行くことになったのであった。

「れいか、なにか悩みでもあるの?」

「・・・やっぱり、龍音さんは鋭いんですね、まるであの方のように、実はわたくしは自ら進んで物事をやったことがありません」

「あの方? (まさかと思うけどボクが神姫化してる姿の事だね) あの方は一先ず置いておいて、つまり、なにか自分から進んでやってみたいと思ってるんだね」

「はい。おじいさまにも相談したところ、すべてやめてみたらと」

「なるほどね、やめてみてどう感じてる?」

「なにかに気づけそうな気がしてるんですが、あと一歩と言うところで」

龍音は公園でベンチを見つけてれいかと二人つきりになったので、単刀直入に質問したところ、れいかは自分が抱えている悩みを打ち明けてくれたのだ。

自らの意志で進んで物事を実行したことあまりないということ話を話してくれたのであった。

れいかは七色ヶ丘中学の生徒会副会長で弓道部に所属しているが、それも周りに薦められて行っていたことも龍音に話したのだ。

龍音から実際一時的だがやめてみてどう感じてるのかと問われたれいかは気付けそうな気がするのだが後一歩と言うところまで話したのであった。

「そこまで来たなら、れいかはもう既に答えは出してるはずだよ!!
ボクができることはもうないから」

「答えはもう出てる・・・!! ありがとうございます!! 龍音さん!!
ん? これはなんででしょう?」

龍音はもう既にれいかの答えを導き出せると感じ取ってれいかに道を委ねたのだ。

れいかは龍音の言葉に何かに気づき礼を言った時だった、龍音のポケットから一枚のカードファイトヴァンガードのカードが落ちたのをれいか拾ったのであった。

「それはカードファイトヴァンガードっているカードゲームのカードだよ。それは「オラクルシンクタンク」の「バトルシスター」のユニットのG4「静水の祭神 イチキシマ」ってカードなんだけど」

「カードファイトヴァンガード……!!」

「ん？ なにか思いついたの？」

龍音は超神次元ゲームギョウ界で武偵所の仕事の追加報酬で手に入れたも行われているという「遊戯王」や「バトルスピリッツ」などに並ぶくらいカードゲーム「カードファイトヴァンガード」の「オラクルシンクタンク」というクランの超越カードと呼ばれるユニット「静水の祭神 イチキシマ」をれいか拾ったので龍音はカードファイトヴァンガードのカードだと説明したのであった。

どうやられいかはそのカードを見て何かに気づいたのであった。

協力プレイでクリアしてやるぜ!!

れいかの悩みを無事(?)に解決した龍音はそのまま仲間と合流するために移動をした時だった。

「助けてクル〜!!」

「れいか、行って!!」

「!! (もしや、あなたさまが!!) わかりました!」

「さてと、行くとしようか」

キャンディが助けを求めてきたので、龍音は大方予想していたような顔をしてれいかを送り出して見送ったのであった。

れいかは龍音の何かに気が付いたらしいが仲間との合流が先決だと思い走り去ったのであった。

龍音はれいかが走り去った方向を向いて人気がないことを確認して念のためにステルスで姿を消して神姫化して仲間と合流することにしたのだ。

「おい、状況はどうなってるって聞いても、大体は分かり切っているが・・・」

「アスナ、みりゃわかるだろ」

「うん」

「まさかのサービス問題全部落としたしな」

「まあ、助けに行くしかないうだな!!」

龍音がプリキュアメンバーが戦っているというよりどう見てもクイズ大会会場のようなことになっているバッドエンド空間上空で仲間と合流したのだが、完全に普通に授業を受けていれば答えられる問題を全て不正解と言う状況に呆れてしまったのだが、あむ一人が粘っていたのであった。

このままほって帰る訳にはいかなないので龍音達はバッドエンド空間を勢いよく突っ込んで行って中に侵入したのであった。

「また!! おまえらオニー!!」

「なんだ、こんどはクイズで勝負か!!」

「来てくれたんだ!!」

「貴様ら!! 日頃どんな授業を受けてるんだ!!」

「ごめんなさい(´・ω・｀)!!」

「流石のおまえも呆れてるかオニー?」

バッドエンド空間内部に潜入した龍音達の目に映ったのはスマイルプリキュアメンバーが礎にされているという光景だったのだが、やっていることがクイズ大会の罰ゲームレベルの内容だったので呆れたのであった。

敵のアカオーニも呆れていることを感づかれていたのだ。

「皆さん!!」

「ビューティ!!」

「こうなったら!! おまえらも答えろオニー!!」

「いいだろう!!」

キュアアフエクシオンが一人で踏ん張っていたところで義姉のビューティが駆けつけてくれて龍音達も参加してのクイズ対決をするのであった。

「遅かったわね!! れいか、その様子だと見つけたみたいね 「答え」を!!」

「ええ。迷っていました。それをあるお方が導いてくださったので」

「さてと」

龍音達&ビューティ&アフエクシオン「此処からは協力プレイでクリアしたやるか!! (のです!!) (わ!!) (してあげます!!)」
「ビューティーったら」

役者は揃ったのであった。

サムライって

アカオーニとアカンベエがスマイルプリキュアメンバーの内ビィティとアフエクシヨンの二人しか残されていない状況でだが、神姫化している龍音達の加勢により振り出しに戻ったのであった。

「行くオニよ!! サムライを英語で言えオニく!!」

「回答者!! 紫仮面ベェ!!」

「アスナく(；。㊦。)!!」

「間違えんといてく(；。㊦。)!!」

バッドエンド王国組から出題された問題はどうか考えても龍音達を見てその場で考えたのであろう、英語で「サムライ」を答えろという問題を龍音に対して出題してしまったことが致命的なミスであることにバッドエンド王国組は気付いていなかったのだが、味方側の拘束されているスマイルプリキュアメンバーもビューティィとアフエクシヨン以外気づいていなかったのでもちろん、

「愚問だな!! 答えは、「サムライ」だ!!」

「ちよつと!! それ答えになってないよく(；。㊦。)!!」

「もうダメやく(；。ω・、)!!」

龍音の成績にしても知識にしてもこういうった問題は普通に考えることが出来れば問題なかったのだが、何分、スマイルプリキュアメンバーはビューティィとアフエクシヨンの二人以外学力に難があるのだった。

龍音は拘束されても問題ないので何も恐れずに「サムライ」とそのまま日本語で返したのであった。

それを聞いた拘束されているスマイルプリキュアメンバーは猛抗議していたのであるが龍音は自身の回答に確信を持っていたのを見抜けていないのであった。

そして答えは、

「正解カンベェ(。㊦。)ノ!!」

「どういうことだオニィ(。㊦。)ノ!!」

キュアハッピー達「どういうこと（なんや）!!」

もちろん龍音の予想通りに正解だったので拘束されているうちのキュアハッピーを解放してのけたのだが、まさか、日本語と同じ英単語がある事に驚きを隠せない拘束中のマーチ達とアカオーニ達は未だにどういうことなのか理解できていなかったのであった。

「いいだろ、出題者に代わって説明してやろう」

「ビューティ。あなたが解説しなくていいの？」

「ここはアスナさんに任せましょう!!」

「アスナちゃんに任せてろ!!」

あまりにも龍音が回答した内容が解説できないようなので龍音が出題者のアカオーニ組に代わって説明することになったのだ。

「海外でも通じる「日本語」はある上に、そのまま英和辞典に記載されている。「サムライ」もそのうちの一つだ!!」

「ウソダオニ〜!!」

「そうなんだ(@^_^)／~~~~!!」

「まず、外国人は日本の教材として「時代劇」とか取り入れている」

と海外でも日本語が通じるものだときっぱりと言いつつ切ったのであった。

やっぱりこうなるの段

龍音達とビューティ&アフエクシヨン姉妹に成す術が無くなったアカオーニ組はと言うと、

「こうなったら!! やってやるオニ〜!!」

サニー&マーチ&ピース「ほったらかし!!」

「どうやら、ゲストが来たのです!!」

「ちよつと、借りるで!!」

「え?」

「ハッピー(・ω・)!!」

「おい!! クマ公!!」

「誰オニ(・ω・)!!」

完全に頭脳戦どころではなくなつたというより元からこうしていればいいのでは良かったのではとは突っ込んではいけないという空気を感じ取つた龍音達は何かがキュアハッピーに向かつてきたのを感じ取つたので構えを解いたところで金色の光がキュアハッピーに憑依した瞬間なぜかコスチュームが和服ドレスに早変わりして前髪に黄色のメッシュが入つたキュアハッピーが爆誕したのであった。

そこに黒髪に赤いメッシュが入つた青年だが聞き覚えがある声が到着したのであった。

「お嬢はん達、辛抱してや〜」

「ああ・ありがと」

「これくらい、お安い御用や!! 行くで!! モモの字!!」

「おお!!」

「変身!!」

《SWORD FOAM》

《AXE FOAM》

「俺!! 参上!!」

「俺の強さにおまえが泣いた!! これで涙は拭いとき!!」

「おおお(〽)(〽)!! かっこいい!! それも二人も(〽)(〽)!!」

「どうやら、わたし達の出番はなさそうだな」

ピンクと白の和服ドレスのプリキュアのコスチュームのみゆきからお好み焼き屋「あかね」の店主の声が聞こえてきたが圧倒言う間に拘束されていた手脚の枷を破壊してしまっていたのであった。

呆気にとられながらもお礼を言ってお礼を言ってお礼を言ったので龍音達は加勢しなくてもよくなったのであった。

赤い桃がモチーフにした仮面ライダー電王ソードフォームと金の文字を模った仮面ライダー電王アックスフォームがスマイルプリキュアメンバーの前に立ってソードフォームは歌舞伎のようなポーズを取って、アックスフォームは相撲の横綱の土俵入りのような構えでどこからともなくちり紙が舞い降りたのであった。

「やってやるオニ〜!!」

「最初っからクライマックスだぜ!!」

「(どうしてこうなるの(十〇十))」

「アカンベェ〜!!」

結局クイズ対決(物理)が始まったというよりクイズ対決はどこへ行ってしまったかと言わんばかりに戦うことになり電王の二人はデングツシヤールを組み立て終わりソードフォームが特攻していったのであった。

アカオー二組VSスマイルプリキュアメンバー&仮面ライダー電王との戦いの火蓋が切って落とされたのであった。

後で言うんだ

アカオーニ組とのクイズ対決が結局いつものように戦闘に入ったしまったところでキュアハッピーにキンタロスが憑依してしまいそこにモモタロスに憑依された野上良太郎も駆けつけて、二人同時に仮面ライダー電王ソードフォーム&アックスフォームに変身してしまっただ。

それを見たヒーロー大好きなキュアピースは興奮していたのであった。

「(劍崎さん達が居たら大はしやぎだな、キュアピースは・・・) 降参するなら承諾するが?」

「出来るわけがないオニく!!」

「オニオニうるせえな!!」

「アカンベエ!!」

「魔神剣!!」

「アスナ、流石なやな?」

「(わたし、プリキュアなのにく!!)」

神姫化(客員剣士)で黒いサイバーゴーグルの下に笑みを浮かべながらこの場に仮面ライダー剣の変身者の劍崎一真達が駆けつけて来たらキュアピースは大はしやぎするだろうと思っていた龍音だった。

龍音はアカオーニに降参した方が身のためだと促したがバッドエンドエナジーを搾取するのが目的であるバッドエンド王国の為に降参しないと行ってアカンベエを喚びてきたので龍音が軽くあしらって仮面ライダー電王アックスフォームは褒め称えてライダーパスを手を持ち、

《FULL CHARGE》

「斧を投げた!!」

「あ、ジャンプした。(。∩。)ノ!!」

「ズバーン!!」

「ダイナミックチョップ・・・!!」

スマイルプリキュアメンバー一同「後で言うんだ(ですね)(かい)」

「アカンベエえええっええ!!」

「後は、おまえだけだぜ!!」

「逃げるオニ〜!!」

電王ベルトのバツクル部分が光りチャージ完了の音声が発せられて仮面ライダー電王アックスフォームは得物のデンガツシャーアックスモードを天高く放り投げて構えた後ジャンプして放り投げていたデンガツシャーアックスモードをキャッチしてそのまま重力を利用してその勢いでクイズアカンベエに大打撃を与えて技名を呟いたのであった。

もちろんスマイルプリキュアメンバーに突っ込まれたのは言う間でもなかったのであった。

仮面ライダーソードフォームが肩にデンガツシャーソードモードを担ぐながらアカオーニに迫って行くとアカオーニは血相を変えて逃げて行ったことで作り出されたアカンベエは消えて行ったのであった。

「これがいるんやろ」

「ありがとうございます」

「嬢ちゃん、その様子やとまた厄介ごとに巻き込まれるみたいやな、嬢ちゃんなら大丈夫や!! 帰るで!! モモの字!! 良太郎!!」

「わかってたよ!! じゃあな!!」

変身解除したキンタロスに憑依された星空みゆきが落ちているデコルを拾いれいかに渡したところでモモタロスに憑依された良太郎共にデンライナーに帰っていたのであった。

只、キンタロスはれいかに近いうちに厄介事に巻き込まれるであろうと告げて行ったのを聞いたられいかは

「(あの方はわたくしに降りかかる困難にどう対処するかを見定めるようですね)」

「助かった・・・」

「わたし達は行くぞ」

「ありがとう!!」

変身を解いたれいかは自身に降りかかる困難を乗り越えてみせる

と誓い、キンタロスの憑依から解放された特異点であるはずの星空みゆきがへ垂れこんでしまい、龍音達は帰ることにして飛び去って行ったのであった。

「ああああ!! あの子達に、わたしの事知ってるか聞くの忘れてた(。D。)ノ!!」

「いいじゃないですか!! あむ、別にどのような過去があろうとあなたはわたたくしの大切な妹なのですから!!」

「このまま、記憶が戻らなくてもいいじゃん!」

「確かに過去に何をやって生きていたことを思い出せないのは怖いけどさ、こうしてわたし達に会えたんだし」

「また、わたし達がピンチになったら助けに来ると思うよ。アスナ達は」

「絶対とは言い切れないと思うわよ!!」

「(そうね、わたしは、確かに記憶を失ってるけど、こうしてみんなに会えただけでもいいわよね)」

あむはまた龍音達に自分の記憶の事を聞くのを忘れてしまったので大声で叫んでしまったのであった。

スマイルプリキュアメンバーは今のままでいいとあむに言ったのであった。

の幻夢コーポレーションの元代表取締役社長の檀黎斗が現れて追いかけて回っていたのであった。

それを見た龍音は静かに鞘に愛刀を納めて粒子化したのであった。「神であるわたしの前でそのような違法ツールは破壊するううううう」

「ぎゃああああ!!」

「自業自得だよ、下っ端、さあ、おまえの罪を数えろ!!」

「げ!! 紫の!! なんでアタシなんだよ!!」

「今更、マジコンなんて誰も欲しくないよ」

「なんでだよ!!」

目の前に一応次期女神にして現在女神候補生第五位が居るがそんなことを気にする男ではない自称「神」である檀黎斗に協力することにした龍音は気に入ったのか右手でリンダこと下っ端を指さしながらあのセリフを言ったのであった。

追い打ちを掛けるが如く龍音からマジコンは売れないと言われたリンダだった。

漫才大会 前編

超神次元ゲームギョウ界のギョウカイ墓場にて仮面ライダーゲームに遭遇した龍音は今更ながらスマホが普及したことでゲームアプリ内課金が主流になっていいる現在で違法コピーツール「マジックコンピューター」こと通称・マジコンを売りさばこうとしていた犯罪組織構成員のリンダもとい下っ端はこっぴどく龍音&仮面ライダーゲームに絞られていたのであった。

「覚えてろおっおおおー!!」

「いや、覚える気ないんだけど・・・ 檀さん、ウォルターさんが用があるので一緒に・・・」

「わかった!! この神の才能が必要になったのだな!! 連れて行きたまえ!」

「(この人、ボクが下級女神だって言っても駄目だろうね)」

仮面ライダーと下級女神であるが次元武偵にして神姫の位を持っている顔見知りの龍音の二人にとっ捕まって喝を入れられたのだからもうマジコンを売りさばこうとししていたリンダはお約束の捨て台詞を言っ逃げて行ったのであった。

龍音は本来の目的である調査を完了したので仮面ライダーゲームこと檀黎斗を連れて帰ることにしたのであった。

龍音はやっぱりこの人はこの世界にやって来て自称・神と名乗り続けるだろうと自分が下級とはいえ神姫であることを黙っておくと決めたのであった。

そんなこんなで無事に一仕事終えた龍音は七色ヶ丘へ向かったのであった。

もちろん、

「さて、スマイルプリキュアは何の騒動に巻き込まれるのやら?」

「アスナちゃんはいつもどおりだね」

神姫化した状態での仕事になるのであった。

スマイルプリキュアメンバーで龍音とアスナが同一人物であることに気が付いていて良そうなのはライブメタルモデルAの適合者で

ある青木あむ位なものである。

と言いつつもそれでも仕事を抜きにしても龍音はこういった仕事が性に合っているであろう、

「今日は、七色ヶ丘商店街で一般参加もある漫才大会があるのでそうです」

「颯ちゃん、コンビ組む？」

「スノー、仕事中は「ラピユセル」で頼む」

「元の姿で観覧するのはいいだろう。どこかに降りれそうな場所へ向かうか」

龍音達は七色ヶ丘町上空で集まってスクリーンを表示して何かを調べていた和真が七色ヶ丘町の商店街で一般人も参加できる漫才大会が催されると告げると、スノーホワイトこと姫河小雪は岸边颯太と漫才コンビを組んで漫才大会に出ようとしていたのであった。

戦わなければ生き残れない事件に巻き込まれて目の前で救えなかった命を目にしたスノー自身も本来ならば戦いから身を引くのが得策なのだが彼女は敢てそれを拒否して現在に至るのであった。

七色ヶ丘町の漫才大会

七色ヶ丘町の商店街で一般参加が出来る漫才大会が行われると言うので龍音達は人目につかないように地上に降りたので神姫化を解除して普段の私服姿に戻ったのであった。

「観客席って無料なんだ」

「そう言えば、あかねがF U Z I W A R Aのファンとか言ってたか？」

「確か、大阪に居た時に見たらしいね」

黒紫に白いストライプス柄のパーカワンプにデニムの短パンに黒光りしている長い髪をポニーテールに結び白い十字キーの髪留めを結っている部分につけている姿の龍音は天龍達と一緒に漫才大会の会場に設けられている観客席に辿り着いて空いている場所に座ったのであった。

東の間の安堵からなのか龍音達は周囲の警戒をしながら以前にあかねがとある漫才師の事を話していたことを思い出していたのであった。

大阪出身者が身近にいる所為か上方のお笑いなどの知識はある程度持っているので龍音達も今から行われる漫才大会を楽しみにしていたのであった。

「龍音ちゃんに、天龍ちゃんじゃないか」

「みんなのみゆき達の応援なの？」

「あ、はい」

「みゆき達も喜ぶよ!!」

龍音達が観客席で座って漫才大会が始まるのを待っているとそこに星空みゆきの両親の星空夫妻がやってきたのである。

二人ともまさか龍音達が来ているとは思ってなかったらしく久しぶりの再会に驚いていたのであった。

突然の出来事にはもう慣れているつもりではいたが龍音達も驚くしかなかったのであった。

「まさか、龍音ちゃん達が来てるなんてな」

「昔を思い出すわね」

「あの頃は龍音ちゃん達と出会った頃はみゆきは人見知りが酷かったっけ」

「そうだったわね（―――）――☆」

《完全に二人だけの世界へ行ってるね（。・。・）》

余程娘の親友たちとの再会に興奮してしまつたらしく星空夫妻は自分達の世界へ行ってしまったので置いてけぼりを喰らつた龍音達はしばらくほっとくことにしたのであった。

一方で

「みゆき達は漫才をするのか」

「クマちゃん漫才って？」

「ボケとツッコミの担当の二人以上のチームを組んでお客さんを笑わせるのが漫才や!!」

「簡単に説明するとそう言うこと!!」

「この前の戦いの際に言った街にポスターが張られてたんだよ!!」

デンライナー内では野上良太郎達が七色ヶ丘町での漫才について話していた。

漫才についてリュウタロスはキンタロスに説明を受けていたのであった。

どうやらモモタロス達も漫才に興味があるらしく良太郎とハナは呆れていたのであった。

この漫才大会で騒動が起きるとは思ってたのだから

客員アツプデート

漫才大会が終わって数日が経って龍音達が普段通りに学業などに励んでいたのであった。

現在、龍音は超神次元ゲームギョウ界のプラネテューヌに建てられている龍音も所属しているEランクから最上級のZ級までいる「次元武偵広域所本部」に仲間達共にやってきたのであった。

ちなみに龍音の次元武偵としてのランクはSSSランクである。

龍美をはじめとする姉達に至っては既に最高ランクであるZランクだが天界での階級は下級から中級までしかない。

龍音は下級第七位でまだ十六歳を迎えていないためであるために特例がない限りは階級は上がることはないが降格は存在する。

そんなことはさて置き、龍音が超神次元ゲームギョウ界のプラネテューヌの武偵所にやってきた理由は簡単で、

「これがスイートプリキュアの力を武器に付与できるようになるの？」

「というより、本来ならばスイートプリキュアに出会った際に龍音達のデバイスに取りつけなきゃいけないんだけど、完成が間に合わなかったからね、簡単に言えば、ラーニング能力が底上げで来たからスマイルプリキュアメンバーの技を自分の技に応用してラーニングすることが可能になってるから」

「ありがとう」

「んじゃ、力を持つ者の役目を間違えないように!!」

血は繋がらないが龍音の義姉にして機械いじりが趣味でそれが高じて現在は龍音共に所属している次元ギルド「流星の絆（ビブロスト）」のメカニック担当になっている特例が認められているのと元超神次元ゲームギョウ界のプラネテューヌの第一女神候補生ということもあって龍音より階級が三つ上の下級四位の地位を持つ薄紫の長い髪をポニーテールに束ねて姉妹で同じ白いゲームのコントローラーの十字キーを模った髪留めを着けている鳴流神美龍飛が龍音のインテリジェントデバイス「玄武」に備わっているラーニングシステ

ムのアップロードを行っていたのが終わったので龍音が受け取りに来たというのであった。

以前のままでも龍音のラーニング能力は十分なのだがスイートプリキュアメンバーとの共闘で記録されていたデータと龍音の実姉である龍姫達が得てきたハートキャッチプリキュアメンバーとの戦闘のデータを取り込むためにはアップデートが必要だったのだが中々する時間が取れなかったのでバッドエンド王国の動向を天界が探ることになって龍音は思い切ってインテリジェントデバイスのアップデートを決断して今に至るのであった。

もちろんの事だが、スマイルプリキュアメンバーはまだまだ伸びしろが残っている可能性があるのもまだラーニングはできていないのであった。

客員剣士!! 急げ

龍音達が超神次元ゲームギョウ界のプラネテューヌでインターネットデバイスのアップデートを完了しちようど武偵所から出ようとした時だった。

【お嬢様!! 大変です!! スマイルプリキュアメンバーが!!】

「わかった・・・!!」

「龍音ちゃん、言わなくてもわかってるみたい」

「またか、着いて行ってやるのです。(。D。)ノ!!」

「わたし達が辿りつくまで死ぬなよ、スマイルプリキュア!!」

天界から緊急で通信が入ってきたので龍音達のインターネットデバイスが応答したのだったのであった。

なんとスマイルプリキュアメンバーが絶体絶命の窮地に追い込まれているということだったのであった。

幾度となくスマイルプリキュアメンバーが窮地になったことがあるが龍音達が辿りつくまでには打開策を見出していることが多かったのだが、どうやら今回はやはり龍音が姉妹揃って感じ取っている悪寒が走ったのだ。

本来ならば今の姿で現場に向かうのだが急を要することもあって神姫化して客員剣士姿になって簡易次元転移でスマイルプリキュアメンバーが居る現場に急行して行くのを天龍を筆頭に後を追うように神姫化して向かって行ったのであった。

「うぐツ・・・」

「うふふふ、こんな痛い目に遭わなくて済んだのに・・・」

「わたし達は・・・」

「いい加減に終わりにしましょう!!」

天界の緊急通達の通りスマイルプリキュアメンバーがピエロのような仮面をつけた男に手も足も出ないまま挙句モデルAを用いた戦術すら通じないという状況に陥っていたのであった。

RPGなどでよくある負けイベントをその身をもって知ってし

